

発達障害傾向のある医療系大学生の修学上の問題と支援

企画者 水野 智美（筑波大学医学医療系）・徳田克己（筑波大学医学医療系）
司会者 西館 有沙（富山大学人間発達科学部）
話題提供者 水野 智美（筑波大学医学医療系）・坪見利香（浜松医科大学医学部）
八田早恵子（名桜大学人間健康学部）・安心院朗子（目白大学保健医療学部）
徳田 克己（筑波大学医学医療系）

KEY WORDS: 発達障害傾向 医療系大学生 修学上の問題

【企画趣旨】

日本学生支援機構（2018）によると、2017年度に大学、短期大学、高等専門学校に在籍する学生の15.8%に発達障害傾向があり、年々、その割合が増えていることが確認されている。これらの状況から、発達障害傾向のある学生への支援を行う大学が徐々に増えてきている。

医療系大学にも発達障害傾向がある学生が在籍している。医療系大学の学生には、医療機関や社会福祉施設等での実習があるため、座学での授業で抱える困難に加えて、実習特有の問題が生じる。患者や利用者とのコミュニケーションがとれない、相手のニーズを把握できない、記録を書けない等の問題から、実習の単位を修得できず、留年を繰り返す、退学をせざるを得ない者もいる。

そこで本シンポジウムでは、発達障害傾向のある医療系大学生がどのような修学上の問題を抱えているのか、大学ではどのような支援をする必要があるのかについての議論を深めたいと考えた。

【話題提供 1】 発達障害傾向のある大学生の特徴と困り感 筑波大学 水野 智美

大学生活で問題を抱える発達障害傾向がある学生の中には、アスペルガー障害の傾向がある者、ADHDの傾向がある者がいる。アスペルガー障害の傾向がある学生は、相手の表情やその場の雰囲気を受け取ることが苦手であるため、結果的に他者とのコミュニケーションをとれないことが多い。また、決められた手順で物事を進めていくことはできても、途中で予想外の出来事が起こったときに、優先順位を決められなかったり、何をしようかがわからなくなり、その場で動けなくなってしまうことがある。

ADHDの傾向がある学生は、時間の感覚をもちにくく時間内に物事を進めることが苦手である。また、忘れ物が多かったり、不注意によるミスが重なってしまうことがある。周りから何度注意されても、同じ失敗を繰り返してしまう。

【話題提供 2】 看護師養成課程の学生が抱える修学上の 問題 1 浜松医科大学 坪見 利香

看護師養成課程の学生は、学内で講義・演習を通じて看護技術や知識を習得したのち、長期間の実習に臨む。

ADHD傾向がある学生は、記録提出、寝坊などの自己管理や、情報の整理が苦手で指導者への報告が要領を得ないため、繰り返し指導を受けることが多い。

アスペルガー障害の特性がある学生は、実習への不適応が生じると、単位取得が可能な範囲で欠席し危機を回避しようとする。担当した患者に欠席した理由を尋ねられると、「記録が書けなくて辛いから」などと正直に答えてしまう。

学生は、指導者から指摘されたことを自己の課題として認識するが、実習の困難さがなぜ生じているのかに気づくことができない。指導者は、学生が実習のどの部分で困難を抱えているのかを注意深く見極め、具体的な対応策を提

示する必要がある。

【話題提供 3】 看護師養成課程の学生が抱える修学上の 問題 2 名桜大学 八田 早恵子

当校看護学科では、発達障害傾向のある学生に対して個別に支援を行ってきたが、平成28年4月より障がい学生支援委員会が結成され、全学的に障害のある学生に対して合理的配慮を実施するようになった。

全学的に障害特性による過敏あるいは鈍麻に対する配慮、コミュニケーションが困難な学生に対する支援、障害傾向の有無について相談にのることが多い。看護学科の学生に対して、座学の授業では科目担当教員への配慮願いや別室受講、別室による試験対応等が行われている。実習では、担当教員による個別面談を通し、学修、生活面へのアプローチを行っている。発達障害傾向の学生は個々の特性が異なるため、実習の調整等での担当教員の負担が大きい。

【話題提供 4】 理学療法士養成課程の学生が抱える修学上の 問題 目白大学 安心院 朗子

理学療法は一对一で患者と向き合い、治療していくことが基本である。発達障害傾向のある学生が理学療法士の養成課程で問題となるのは、長期間の実習場面であることが多い。アスペルガー障害の傾向がある学生は、疾患の知識はあるが、目の前の患者の表情を読み取ることができず、コミュニケーションに問題が生じる。「担当から外れてほしい」と患者から要請されることがある。

ADHD傾向がある学生は、検査機器や自分の持ち物を病室や訓練室に忘れて、紛失することがあったり、段取りが悪く患者のニーズを把握するために多くの時間が必要になることが多い。実習指導者は「何度も注意をするが、改善が見込まれない」と感じている。

【話題提供 5】 医師養成課程の学生が抱える修学上の問題 筑波大学 徳田 克己

医師養成課程の中にはアスペルガー傾向のある学生（アスペ学生）が多い。もともと学力の高いアスペ学生は偏差値の高い医師養成課程に入学することが多い。医師養成課程に入学するアスペ学生の多くは自分の特性を認識しており、見通しを持って、修学上のミスを防ぐことができている。また、養成課程の実習および卒業後2年間の初期研修では指導医がマンツーマンに近い形で指導するため、その段階までは多少の問題があっても、通過していく。加えて、医師免許を持っていても、潰しがきかないため、周囲もとにかく医師にさせようとする。現在、問題になっているアスペ学生とは、患者やコワーカーとのコミュニケーション上の問題を抱えているケースがほとんどである。

(MIZUNO Tomomi, TOKUDA Katsumi, NISHIDATE Arisa, TSUBOMI Rika, HATTA Saeko, AJIMI Akiko)